床屋

宮沢賢治

青空文庫

本郷区菊坂町

※

九時過ぎたので、床屋の弟子の微かな疲れと睡気とがふっと青白く鏡にかゝり、室は何だかがらんとしてゐる。

「俺は小さい時分何でも馬のバリカンで刈られたことがあるな。」

「えゝ、ございませう。あのバリカンは今でも中国の方ではみな使って居ります。」

「床屋で？」

「さうです。」

「それははじめて聞いたな。」

「大阪でも前は矢張りあれを使ひました。今でも普通のと半々位でせう。」

「さうかな。」

「お郷国はどちらで居らっしゃいますか。」

「岩手県だ。」

「はあ、やはり前はあいつを使ひましたんですか。」

「いゝや、床屋ぢゃ使はなかったよ。俺は大抵野原で頭を刈って貰ったのだ。」

「はあ、なるほど。あれは原理は普通のと変って居りませんがね。一方の歯しか動かないので。」

「それはさうだらう。両方動いちゃだめだ。」

「えゝ、噛っちまひます。」

※

鏡の睡気は払はれて青く明るくなり今度は香油の瓶がそれを受け取ってぼんやりなった。

「失礼ですがあなたはどちらに出ていらっしゃいますか。」

「図書館だ。」

「事務員ですか。」

「いゝや、頼まれて調べてゐるんだ。」

「朝はお早いでせう。」

「朝は六時半にうちを出るよ。」

「ずゐぶんお早いですね。」

「どうせうちに居たっておんなじだ。」

※

睡気が忽ち香油の瓶を離れて瓦斯の光に溶けて了ひ室が変に底無しの淵のやうになった。

「丁度五分かゝりました。あなたの頭を刈り込むのに。」

「早いな。」

「いゝえ。競争の時なら早い人は三分かゝりません。」

「指が痛くなるだらう。そんなにしたら。」

「えゝ、指より手首が苦しくて堪らなくなります。」

「さうだらう。どうせそんなぢゃ永くは続かない。」床屋の弟子はバリカンを持ったまゝ手首をぶらぶらふってゐる。

※

瓦斯の灯が急に明るくなった。
「僕のひげは物になるだらうか。」
「なりますとも。」
「さうかなぁ。」
「も少し濃いといゝひげになるんだがなぁ、かう云ふ工合に。剃らないで置きませうか。」
「いゝや、だめだよ。僕はね、きっと流行るやうな新らしい鬚の型を知ってるんだよ。」
「どんなんですか。」
「それはね。実は昔の西域のやり方なんだよ。斯う云ふ工合に途中で円い波を一つうねらしてね、それからはじを又円くピンとはねさすんだよ。こいつぁ流行るぜ。」
「今どこで流行ってゐますか。」
「イデア界だ。きっとこっちへもだんだん来るよ。」
「イデア界。プラトンのイデア界ですか。いや。アッハッハ。」
「アツハッハ。君。どうせ顔なんか大体でいゝよ。」

※

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第十四巻」筑摩書房
　　1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行
入力：林　幸雄
校正：mayu
2003年1月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

床屋

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/